

〔論文〕

『中央食堂』開設の経緯—番茶の家綺談（その1）

高橋 博 久

1. はじめに

名古屋市東区にある榑木館は、大正・昭和初期にこの地で陶器の貿易商を営んでいた井元為三郎氏の邸宅の遺構^{（註・1）}を市民有志が借り受けて開いた、市民活動のためのオープンスペースである。1996年1月以来、井元氏との間に五年間という借家契約を結んだ伊藤晴彦氏を筆頭とする市民有志5組のファミリーが、奥座敷や中庭などを市民活動の会合の場とするほか、喫茶や食事のできる雑貨店や住宅設計を得手とする建築事務所などを開設している。ここには、本稿の筆者も借家人の一人であることを併記しておこう。

この敷地は、かつての尾張藩の武家屋敷跡でもあり、白壁・主税・榑木町町並み保存地区に位置し、ここで榑木館の活動が始まったあと名古屋市の文化財に指定されている。

榑木館開設に際して、この屋敷を借り受けた店子である私たちが構想した事柄^{（註・2）}の一つは、名古屋の街にかつて在ったという「番茶の家」の再現であった。しかし、実のところ、「番茶の家」には往時の文化人士が出入りしていたという程度の聞きかじりであって、「番茶の家」なるものの実態についてはほとんど知識をもっていなかった。

名古屋に「番茶の家」が在ったということは高名の音楽家、中野二郎氏^{（註・3）}から伺ったのが最初のことである。当時筆者が編集担当

していた雑誌「C&D」で企画した水野宏氏・藤川壽男氏との鼎談^{（註・4）}で、中野氏は若かりし頃の名古屋の市民文化を語り、「知識人たちが出入りしていたところ」として「番茶の家」の所在を指摘している。

追って、雑誌「C&D」での中野氏と日本画家、田中八重氏との「番茶の家」についての対談^{（註・5）}を企画するなかで、「番茶の家」を主宰した長野浪山^{（註・6）}という人物の存在を知ることになった。

筆者は、榑木館を開設以来、「番茶の家」に関する事実調査を発意し、若干の資料的整理も進んできたので、ここでは、のちに「番茶の家」開設へとすすむ最初の契機となった「中央食堂」設立の経緯について紹介することとしたい。

2. 番茶の家と長野浪山

「番茶の家」を開設し、主宰していた長野浪山は、キリスト教の牧師であったが、教会を基盤として布教するといった行動を執らず、もっぱら若者を集めた文化座談会を開いたり、街頭で道行く人との対話を重視するといった独特の布教活動を行って、終生キリスト者としての道を全うした人物であった。

愛媛県今治市を故郷として、16歳の頃そこに滞在した徳富蘆花から英語を学び、同時に洗礼を受けている。その後、英語の能力を買

われて職に就いている。

1898年（明治31年）頃には赴任した仙台中で、自ら新婚の家庭を開放し、二高の学生たちを中心とした学生倶楽部「理想園」を開設した。そこにはテニスコートや体操の設備を設け、図書部、談論部などの部屋があり、「若い男女を気持ちよく、美しく、楽しく遊ばせる。それが私の信ずる本当の私自身の伝道であった」と、自伝に述べている。

それは島崎藤村が東北学院の教師であり、吉野作造や内ヶ崎作三郎、小泉丹などが二高の学生であった時代、小さいが異彩を放った事業であったと考えられる。

米国公使館（当時はまだ大使館ではなかった）の翻訳官として東京に戻った後、浪山は1908年（明治41年）、教会の牧師として名古屋に赴任した。ここで彼は「清和会」という社交団体をつくり、その活動を通じて当時のインテリ層のなかに知遇を広め、名古屋新聞の與良社長や小林橋川主筆（のちの名古屋市長）などの有力者からの信頼を得ている。

1918年（大正7年）、東京新橋にあった「平民食堂」に感銘して簡易食堂開設を提唱、愛知県知事や名古屋新聞社長など多数の後援を得て矢場町に「中央食堂」を開設したのが、のちの「番茶の家」への最初の契機であった。その食堂の二階を場として、浪山は市民大学という文化運動を起こし、白樺派の文人有島武郎、武者小路実篤をはじめ秋田雨雀、野口雨情などを招いて、座談会などを開いている。

その建物が道路改修のために放棄された後、鶴舞公園前に「文化茶屋」を開き、そこでも各種の座談会を開催し、「市民大学」という機関誌が60号まで刊行されたという。

「番茶の家」は1927年（昭和2年）、当時

の名古屋新聞社の筋向かいに開設されている。この場所は番茶は10銭、集まりの時は茶菓子が20銭の席料なしという、貧乏な文学青年たちの安住の地でもあった。

四年の後、「番茶の家」は弁護士の中野喜一郎が松坂屋の東に新築した貸家の一軒に移転した。家も真新しいところに、黒塗りの丸テーブルにソファといった優雅なサロンは、客筋も地元の文化人やインテリ女性といった華やかな社交場であったという。

1933年4月（昭和8年）、御器所に「ローザン荘」が建設され、浪山は「健実なる雰囲気の下で、自ら行われる男女共学で、人間らしい人間を造ること」を提唱し、当時流行の社交ダンスの会もよく開かれた。若い男女が親しく、しかも明るく意見を交わし、交際できるこのような場は、当時としては極めて特異なものであったといえよう。

この一連の活動の中で機関誌「番茶の家」が発行され、第45号（1931年10月）をもって「カルチュア」と改称し、それは第40号（1935年9月）まで続いた。

しかし、当初の大正ロマンに包まれた世は、10年ほどの間に大陸での戦乱が始まるという急激に暗雲立ちこめる時代に移っていった。「番茶の家」がいつ閉じられたのか、どうして閉じられたのかは明らかではない。しかし、こうした自由の場が許されない時代にあったことに違いはない。

1935年（昭和10年）2月、浪山は街頭に立ってホイットマンの英詩を朗吟する独自の人間教育をはじめ、その三年の後上京して松倉山荘に滞在し、その後は故郷の今治にもどり、1959年に齢90歳で没するまで再度名古屋を訪れることはなかったという。

3. 最初の投稿

新橋から乗った名古屋へ帰る汽車の窓から、医師で社会主義者の加藤時次郎^{（註・7）}が経営する「平民食堂」を見ていたく心を打たれ、その想いを車中で書き留めて投稿したと、浪山は自伝のなかに書き残している。

投稿は、名古屋新聞紙上に設けられていた投稿欄「反射鏡」に掲載された。いわゆる投稿欄は「目安箱」という欄が別にあるので、この欄は投稿による参加型の文化記事といった体裁であり、文化、時事に関する評論といった内容が主であった。

以下にその投稿の全文を紹介しておこう。

反射鏡

浪山生

＝平 民 食 堂＝

▲平民食堂を設けたい、東京にも大阪にも設けられたが我名古屋市にも段々其れを設ける氣運が向いて来たやうに思はる、美味くて滋養に富んだものを極めて安價に食はす共同の食卓制が即ち平民食堂の本旨である、若し其の方法が旨く案出されたら、どんなに便益なことであろう、どんなに喜ばしいことであろう

▲平民食堂の經營は半道樂で半營利的でなくてはならぬ、即ち單に實質に近い程の薄利にて個人の家庭にては到底出來得ざる低價で相當の食物を提供する許りでない凡ての點に於て上品に而も居心地よき準備と其の用意がなくてはならぬ

▲どうすれば其れが出来るか、私に一つの案がある、先づ其の食堂に用ゆる家屋の家賃と設備費一切を特志家の寄附に依って支辨する事である、即ち平民食堂後援會なるものを幾十名かによって組織するのである、此れはそんなに至難な事ではあるまい、眞に有益に用

ひらるゝ寄附金ならば、喜んで其れに應ずる特志家は決して尠くないと思ふ、物價騰貴の折柄此の方法に依って所謂中産階級の貧苦を多少にても救済することが出来るとの理解を得ば必ず特志寄附者が現るゝに相違ない、假に金は解決出来るとして次は經營の任に當る人物の問題である

▲案^{おも}ふに經營者は此の事業に依って自己の生活費を得ねばならぬ境遇の人であつてはならぬ、別に自己の生活の立っている一個の紳士で而も公共心にも社交性にも富み此の事業を自己の道樂とする者でなくてはならぬ、そんな人を見出すことは容易でないかも知れぬが必ずしも無いではない、恐ろしい勢いで生活難に襲われつゝある今日此の頃そんな特志家が現れないとも限らぬ、いや^{たしか}隨に現るゝとの確信を私は有つてゐる

▲既に家賃と設備費との寄附と經營者自らの無報酬的の公共心がありとすれば實際直接に業務に従事する雇員全體の給料だけを營業より生み出せば可いとのことになる唯夫れ丈の利益を得ればよいのである、夫れでどうして實費に近い安價な食物が提供出来ない譯はあるまい

▲私は此の事業を所謂商賣^{いわゆる}にせずして共同俱樂部式の食堂としての色彩を濃くしたい爲に凡ての設備に美術的の意を用ゆるは勿論、給仕には相當教育あるものを選び主客共に打解け得らるゝやうに仕向くるが肝要であると思ふ尚雇員一同に此の業務に關する凡ての利害を共にする法案を立て各自に自己の事業たるの感を抱かしめねばならぬ夫れが事業の實質的發展の祕訣である

名古屋新聞 1918年（大正7年）8月11日（全文にルビがあつたが大略は省略した。他は原文のまま—以下同じ）

投稿の内容は、個人の家では到底出来ない程の、安くて実質的な栄養があつておいしい料理と芸術的、文化的な雰囲気を提供できる、上品でしかも居心地の好い共同的食卓制の店をつくらうということではじまっている。

投稿の趣旨は、それを設けるための具体的な方策の提案である。開設にあたって必要な経費は平民食堂後援会という組織で寄付を集め、公共心あふれた経営者のもとで利潤を求めず運用し、営業利益はもっぱら実際直接の業務に従事する職員の給料の支払いにあて、職員とは協同的な協約を結ぶといった、半道楽、半経営的共同倶楽部型食堂として、提案している。

ここで提案されている食堂運営の形態は、非営利による経営であり、それも従事する職員と利益を共にする共同的な協約を結ぼうというのは、当時としては非常に先進的な構想であつたらうと注目される。

これが平民食堂を設けようという浪山の最初の呼びかけであつた。

この投稿とともに、浪山は友人で名古屋新聞社長であつた與良松三郎に相談を持ちかけ、その足で與良と同道のもと松井茂愛知県知事に面会しその具体策を協議している。自伝によれば、「知事は頗る乗気になつて一万円の寄附募金を提案され、その内の五千円を素封家五人に千円宛寄附してもらい、残りの五千円を広く有志の寄附を仰ぐ事に協議一決。そして素封家の寄附依頼は知事自ら当たる事と成つた」と、この事業の開始を宣言している。

4. 募金活動の反応

この募金活動の経過については、浪山から話を持ちかけられた與良が詳細に報告してい

るので、やや長文であるが、以下に紹介しておきたい。

大阪の簡易食堂を見る (一)

當市の簡易食堂設立の前提として

與良生

◇ 食堂視察前記

—貧富の緩和に心して—

内務省觀察官の復命書によると、今度の騒擾^{そうじょう}の原因中に貧富の懸隔^{けんかく}の甚だしくこと、成金輩の放縱の行為が貧者を激發したこと少なからざるを説いて居る、或はさうかも知れん、我々も貧富の懸隔^{けんかく}の益々甚だしくなるのを不斷的原因とし、米價暴騰という偶然的原因によりて恐るべき騒動が勃發し全國に傳播したものだと思つて居る、だから何事にあれ、少しでも貧富の懸隔^{けんかく}を少くし貧者の爲に便利だという事業は社會政策の一端として一日も早く實行せねばならぬ

◇ 社會の爲めに

—一も二もなく同意した—

此點に思ひついて簡易食堂の設置を計畫されたのは、宗教界にありて常に社會問題に注意しつゝある木津無庵、成瀬賢秀、長野直一郎の三名であつた、さうして私にも盡力奔走せよとのことであつたから、私は一も二もなく同意した、周囲を顧慮^{こりよ}すれば、私の参加は利害得失相半するかも知れぬが、社會の爲に盡すの誠意があれば、何も周囲を顧慮^{こりよ}する必要はないと考へた、元來私は政治問題よりも社會問題に深い興味を持つてゐる、徹底した社會問題に没頭することが出来るなら、新聞社の方は退いても關^{かま}はぬと思う位だ

◇ 知事を訪うて

—先づ賛成を得た

幸い「渡邊崋山」「二宮尊徳」両書の發行で得た金がまだ一二年を支ふる位残ってゐるから、いざとなれば専心没頭することも敢て苦しくないのだ、そこで先發起人諸君と松井知事をうて意見を叩いたら自分もかねてから、其の心があつたが之は精神的の仕事である、誠意を以て従事せねば成り立ちもしないし又失敗もする、而るにいま宗教家によりて發起されるのは極めて喜ぶべきことである、と云つて賛同の意を表された、市長の意見も同様である、大岩市會議長も同じく賛成された、商業會議所副頭取の伊藤守松氏を訪うて意見を求めたら、自分もかねてさう云ふ考へを持ってゐたから岡谷清次郎君にも傳へて助力しやうとのことであつた

◇ 趣意書の発送

一市内知名の人々宛に一

かく四方面代表的地位に居る人々の賛成を得たから、十七日の午後四名の名を以て次のような趣意書を知名の人士にあて発送した。

簡易食堂設立趣意書

食糧問題の爲我国未曾有の不祥事を現出したことは御同様傷心の極みだと存じます併し人心は確かに一變しました、殊に資産階級と労働階級との調和を圖らなければならぬということは、苟くも社會政策に着目するものゝ最も切實に感じた所であり如何なる方法如何なる施設を以ってすべきかについては各位の御考究になつて居ることゝ存じますが名古屋市には社會的事業が備わつて居らないことは何人も認むる所であります、今度食糧問題がハケ間敷くなつたについて私共の切實に感ずるのは社會政策の第一として家庭のない労働者や薄給者の爲に最も必要である簡易食堂の設けがないことでもあります、之は東京にも大

阪に既に有りますから其の性質や實効の如何は御承知のことゝ存じます、私共が此の企てを四五の富豪にお話しました所が良い考へである自分達もかねて思いついて居たことだと申されます、以つて此の事業が一般の要求に觸れているといふことが分かります、けれども此の事業は微力私共の企てとしては餘りにも大事業過ぎますから有力な各位の御寄附を仰ぎて其の目的を成就し以つて社會事業の一端としたいのであります

◇ 五千圓の寄附

一發起人皆な驚喜す一

超えて十八日即ち日曜の朝、私は早朝木津氏から我が耳を疑ふばかりの電話に接した、木津氏は毎日曜日の朝信友商会へ精神修養の講話に行かれるのを例としてある、此の恒例の講和が済むと、店員一同の名義を以つて五千圓の寄附の件を申出られ昨夜即ち趣意書が着くと同時に作つて置かれた小切手を即座に手渡しされたといふ電話である、一中略一

◇ 設立豫定變更

一先づ大阪の食堂視察

最初の豫定金額は一萬圓であつたのに、其の半額が一寄進で出来たことに力を得た四人は、直ちに知事や市長さんを訪問していろいろ着手上の意見を叩いた末、當初の考へを抛擲して次の如く性質を分明ならしめなければならぬことになった

第一に専ら薄給者及び家庭なき労働者の爲にするものを中央部に一ヶ所設くこと

第二に専ら労働者の便利を計る爲に東、西、南の三区に一ヶ所づつ設くこと

第三に専ら貧民の爲に救恤の意味を有するものを其の部落付近に設くこと

かく性質を分明に定めていよいよ實行計畫

に移ると、種々の疑問が生ずるので、大阪市にて試みられつゝある簡易食堂の實際を視察せねばならぬこととなり、私は十九日夜出發し、二十日朝梅田驛に着いたのである

名古屋新聞 1918年（大正7年）8月22日

発起人に名を連ねている木津無庵、成瀬賢秀の二人はいずれも僧侶であり、なおかつ荒れた当時の世相に在って精神講話などを通じて巷間に説を唱えた人物として知られる。

配布された趣意書全文を含み、募金に取り組むに際して各界の人物がその趣旨に賛意を表している様子が詳細に述べられている。市民の募金に対する反応も、主催者自ら驚喜するほどに好意的であったことが読み取れる。

実は、当時の新聞紙上では、簡易食堂の募金以外にもいくつかの募金活動が行われていたのである。米騒動で問題化した米の廉売活動への米廉売資金募金、シベリア出兵兵士やその家族を支援する恤兵寄金、出征兵士慰問基金、尚武會寄付金などといった寄附の広告や募金の経過報告が連日掲載されている。こういった大型の募金活動が行われていた折にすすめられたこの募金活動が、市民に好意的な反応で受け止められたことに注目しておきたい。

予想を越えた募金状況に、主催者たちはとりあえず食堂をつくりたいといった当初の姿勢を改め計画の練り直しをしている。その結果を、第一項は中央部、つまり中区に設ける労働者を対象とした食堂、第二項は残りの三区に設けるもの、第三項はいわゆる貧民救済のための要所に設けるものといった整理をしている。当時の名古屋市は、中、東、南、西という四区によって構成されていたから、全

市的に設ける計画が進んだということになる。

このことについて與良は、反射鏡への投稿という形で改めて表明している。

反射鏡

「名古屋に簡易食堂を設くるならば」

與良生

◆ 模範の計畫は

さて名古屋に簡易食堂を設くるならば如何にすべきや、発起人等當初の考へは中央に模範食堂唯だ一個を作り實例を示すものとするにあった、所が松井知事の意見を聞くに及んでその計畫を一變しなければならなかったのは前に記した次第である、さうして最初の模範計畫に於て經營費一萬圓を豫算した時、發起人等の微力を以てしてそれだけの金が容易に集め得るや否やを懸念した、けれどもこんな時節柄であるから、誓って寄付金募集の勧誘に出かけないと決心した。

◆ 自由意思から

それは人々の貴重な自由意思を害する恐れがあるからだ、故に今集まった一萬五千餘圓の金及び今から集まるべきものは何れも寄附者の自由意思から湧き出でた尊き靈泉であると同時に、その靈泉に微塵の濁りだも與へざらしむべく大なる責任を感じ、この責任を果たすと否とは懸りて實行の如何に存する、實行は金を集むるよりも更に難いものといふ觀念が強く胸に刻まるゝ

◆ 地方的の食堂

一萬五千圓の金があれば、中央食堂と貧民部落食堂一ヶ所の設備は十分出来る、前者に就ては地所の都合さえつけば直ちに實行に着手、刷る手筈に一任してある、後者に就ては貧民の救世主たる原天随君に一任してある、残る

問題は東、西、南、三区に於ける地方的食堂であるが、之は今後集まるべき金額の多寡によって方針を定めねばならぬ、さうして數が豫定の如く出来るなら其の經營一にして統一あるものとしたい。その故は經營者が異なると其の間に競争を生じ下らぬ心配をせねばならぬことになるし、材料や使用人や器具を繁閑に応じて融通し合うことが出来ぬからである。

◆ 有効に使用せん

此に我々の感激措^{あた}能はざることは趣意書を發表してより旬日ならざるに二萬圓弱の金が集まったことである、此の如きは富豪の心理が一變した結果であるとは云へ、一介無名の士に對する信用の裏書をされたものと思へば、何となく心持のよからざる得ない、人生意氣に感ずとも云へり、又士は己を知る者の爲に死すとも云ふ、我々は集められた金を尤も有効に使用することによりて夫等の人々の高意に報ひたいとおもふ。

名古屋新聞 1918年（大正8年）8月26日

募金活動を行うにあたって、自由意思の具現化ということを慎重に配慮したことをうかがわせる文面である。先にも述べたようにいわば国策的な募金が行われている時局への配慮と、この企画そのものを市民の自由意思の浄財によるものものとするべく構想した主催者の考えと責任感が表明されている。

さらに、運営上の構想が話題になってきていることは彼らの夢がいよいよ実現するという時点でのものであることをうかがわせる。

5. 二度目の投稿

名古屋にも簡易食堂をつくろうという募金が集まり、それも予想以上の金額となるに至つ

て、浪山は再び名古屋新聞に投稿する。

その趣旨は、浪山の呼びかけた食堂の内容を、中央部の食堂で具体的に実現しようというものであった。

反射鏡

浪山生

▲簡易食堂に對する希望

▲愈^{いよいよ}我名古屋市に簡易食堂が建設される見込が立った。其の爲に特志家の寄付の申込が今日迄に約二萬圓に達したのは意外の成功と云はねばならぬ。發起人は當初互に申合せて殊更に寄付を勧誘に出掛なんだ寄付者の貴重なる自由意志を重んずるは精神的立場から企圖した此の如き公共事業の當然採る可き道であると信じたからである。私は此際市の中央部に設けられんとする食堂に就て希望の一端を述べて見たい。

▲中央部簡易食堂は言ふ迄もなく慈善食堂でも一膳飯屋でもない。清楚な居心地のよい実費食堂である。知事さんでも小使でも富豪でも労働者でも實費を拂ふ物は平等に取扱わるゝ食堂である。此の食堂内では肩書は一切通用しない。誰れもかれも歓迎さるゝ一視同仁の一小世界である。そこにこそ如何なる階級の人も快感を覚え慰安も得らるゝと云ふものである。家族的！私は夫れを此の食堂の特色の一つに算へたい。

▲食堂内の装飾は美術的であつて欲しい。一時の費用を吝^{おし}まないで食卓も椅子も氣の利いた感じの良いものを選ぶがよい。若し夫れ食器に至つては堅牢なると共に清潔の感を與へるものでなくてはならぬ事は言ふ迄もない。口を喜ばす許りでない目も喜ばすと云ふ點に特に注意す可きであると思ふ。美術的一夫れを其特色の第二に算へな（「た」の誤り—引用

註）い。

▲食堂は是非共二階建であって欲しい。そして其二階では番茶に菓子を提供する設備が施して貰いたい。食後二三銭の菓子代を拂つて番茶を啜るなど言い難き平民味があるではないか。一同に茶を呑むことは單に茶を呑むに止まらない人心の緩和はそんな所から生れることを味解せねばならぬ。人間同志の親みと云ふものは番茶一杯仲立ちになることも稀ではない。其の効果は兎も角として家族伴れや友達伴れで一寸散歩に出た^{ついで}序に立寄ることの出来る手軽なそして清楚な場所が欲しいとの聲は能く耳にすることであるが簡易食堂の二階は其の要求に應ぜらるゝようでありたい。平民的！夫れを第三の特色に算へたい。

▲二階には新聞雑誌を備え置くこと。小集會を開くことの出来る設備がなくてはならぬ。たびたび食堂で出會う爲に互に親しくなった連中が時々申合せて簡易な而も趣味ある茶話會を催すなど社交上最も妙ではないか。言はば一種の俱樂部式の教養機関であって欲しい。若し二三種の樂器を備え付ける程に運んだら、小音樂會も容易に聞くことが出来、自然情操教育の小さき便りとなると云ふものである。俱樂部式！夫れを第四の特色に算へたい。

▲要するに私は中央部の簡易食堂は^{おも}重に俸給生活者の爲の楽しい教養場であり清い娛樂場であることを願うのである。其の美術的な装飾、家族的な親しみ平民的又俱樂部式の用意等の力に依つて食事以外に^{しらすしらす}^{うち}不知不識の裡に互に精神生活の内容を豊富にする事が可能ならば、其の設立は^{けだ}蓋し教養上偉大なる事業として誇るに足ると思ふ。

名古屋新聞 1918年（大正7年）9月2日

これまで募金活動の報告とともに與良の記述によって紹介されてきた内容は、市内各所に慈善的な食堂を設ける計画として進展してきた。浪山はこれに対して、市内中央部に設けるという食堂については、慈善食堂でも一膳飯屋でもないまさに市民の食堂であるべきであると論じている。

第一に、何人も拒まず平等であること。第二に、口だけでなく目も喜ばす美術的であること。第三に、二階建てであること。第四に、その二階は市民のクラブであること。総体として文化的であり、芸術的で平民的でありたいという。

特にここで注目されるのは、浪山が食堂の二階について独特の構想を述べていることである。その発想の起点は、この食堂開設の目的を救貧、救恤に置こうとするのではなく、そのころ都市住民として次第に増えつつあった俸給生活者という新しい市民階層を対象にしようとしたことにある。

そこでは茶菓子を提供し、新聞雑誌を備え置き、食堂で出會った人々が趣味深い茶話会や音樂会などを開く。それを浪山は市民のクラブにしようと構想する。これこそ後に「番茶の家」に引き継がれる中央食堂の真髓であった。

6. 中央食堂構想の具体化

募金の総額が初期の目標額を超え一応のまとまりを成したことを受けて、四名の発起人たちは、その主旨に照らして公正な手続きに諮ろうと募金をはじめめるに際して相談を持ちかけた松井知事等と、簡易食堂開設を具体化すべく協議をしている。

簡易食堂の設立を訴え拠金を集めた浪山ら

は、この取り組みをその趣旨に照らして公正な手続きに諮ろうと協議をすすめた。その結果は、新聞紙上に一般記事の体裁で報告されている。

簡易食堂 設立案成る

中央部、及び奥田町蘇鉄町に設立

中央部は矢場町共楽園内

三日午後三時木津無庵師等の発起にかゝる簡易食堂設立案協議會を西新町赤十字社樓上に開きたるが出席者は賛成者側を代表する意味に於て松井知事、佐藤市長、大岩市會議長、伊藤守松氏の四人、発起人側は木津師の外成瀬、長野、與良の三氏にして、協議の結果左の如く決定せり

一、醸金一萬九千圓に達したるを以て、先づ第一期事業に着手すること

一、第一期事業として左の三箇所に開設す

中央部（南大津町共楽園内）

奥田町

蘇鉄町

一、建設順序 中央食堂は直に着手し其の建設費は一萬一千圓とし、奥田町及び蘇鉄町の建設基金として五千圓を當て、奥田町は遊園地の完成に伴ひて其地方に適切な施設を爲し蘇鉄町は労働寄宿舍の完成に伴ひて其施設を全くせんとする豫定

一、法人組織 事業の確實と財産の安固を期するために、財團法人組織となし其續を履行すること

右の協議決定後松井知事は小河博士の簡易食堂論を引用して詳細の注意を與へられ五時散會したるが法人組織の手續は迅速に履行したる上経営事務一切は発起人の手を離れて新たに設けられるべき法人役員の手に移さるべ

き筈なり

名古屋新聞 1918年（大正7年）9月5日

ここで知事の指摘した小川博士の簡易食堂論というのが具体的に如何なるものかはわからないが、情勢不安のなか不穏な動きに注意すべしと促したと考えると大きく的を外したことはないであろう。

ともあれ、先に與良が表明した簡易食堂開設構想のなかの第一項であった中央食堂と、第三項の救恤策としての食堂二ヶ所が着手されることとなった。中央部の食堂は南大津通共楽園内に開設と決まった。共楽園はプールもあって当時の市民の遊園地的な場所であった。その他の簡易食堂二ヶ所の開設についても具体的な手筈が整っていることがわかる。

何れも、寄金を基とした法人組織を設け運営を担当することとし、事務の一切が発起人から法人役員に委譲されることになった。

7. 三度目の投稿

簡易食堂設立協議会で示された法人組織の内容は詳らかではないが、浪山は中央食堂開設にあたってそれに加わり、中心的な役割を果たしたようである。それは浪山が三度目の投稿を行っていることでわかる。この投稿で浪山は、「市内中央部」の食堂の事業を担う者として、更に一步進めて、事業の進捗状況を報告すると共に、調度品の寄贈やシンボルマークの発案に市民の積極的な参加を呼びかけている。

反射鏡

長野浪山

三たび簡易食堂に就て

▲私は是迄二度第三者の立場から簡易食堂に

関する卑見の一端を述べた。今回は同事業関係者の一人として市の中央部に設ける同事業の経過と二三の希望を述べる自由を與へて貰ひたい。

▲先ず第一に私共は寄付金約二萬圓を託されたので非常に其責任の重きことを感じたのである。そこで何よりも先に適當なる建築材料を最も安價にて得る可く、あちこちと尋ね廻り奔走^{はし}廻った結果、豊橋市河原座の建物一切を買入ることに運んだのである。同建物は約十八年前に道楽半分に入費^{おし}吝まず建てたものとして其用材は悉く桧と櫟にて頗る堅牢なると共に實に立派なものである。建坪は約七十坪あつて代價は二千百圓である所謂掘り出しものと言つてよいと思ふ。そして數日前から打毀しに掛り昨今一切の用材^{ことごと}を悉く船積にしているから一兩日の内に名古屋着の筈である。そして着荷と同時に晝夜兼行で建築に取り掛る段取りになつて居る。尤も職人不足の事であるから何日迄に出来上るかは今言明なし難い。食堂の建坪は約四十坪で炊事場其他一切を加えて約七十坪の總二階の建物になる見積である。

▲この古建物を買入れるに就ても亦食堂建築に着手するに就ても其任に當るものは何れも所謂商賣氣を離れて夫れぞれ義侠的精神を以て従事してゐるのだから建築費の割合に必ず見事なものが出来上る事と信じている。見事と云ふは華美の事ではない事は謂ふ迄もない。夫れでも出来上った後に萬一簡易食堂には贅沢過ぎるとの非難を蒙るやうな事があつたら其節は十分辯解する積りであるが、今は唯見事に出来上るとの豫想丈を言ふに止めたい。

▲建築の方面は右の如く運ばせて居ると同時に椅子、テーブル、食器等に就ても種々と苦

心を爲し、成る可く好い品を安く得たいものと努めたる結果簡易食堂の主旨を理解して極めて薄利で造るとの篤志職人を見出し既に夫々製作に着手せしめて居る次第である。そして此等一切の器具は来月末迄には出来上手筈になつて居る。尚財團法人組織に就ては目下其の手續き中であるから不日其點も遺憾なく完備する筈である。

▲以上で大體簡易食堂の事業が如何に運ばれつつあるか理解されること、と思ふ。そこで私は此機會に特志家諸君に二三の願ひを持ち掛けたい。其一は食堂内の裝飾に就て考慮を煩^{わづら}はしたいと同時に思い思いの裝飾品を喜んで寄贈して貰ひたいと云ふ事である。繪畫でも盛花鉢でも鏡類の如きものでも或は楽器でも何んでも宜しい世間で所謂贅沢品として見倣されて居るもので實に必要缺く可らざるものと自信する、品の寄贈が願ひたい。私共の理想とする簡易食堂は單なる喰う場所でなく其處には人心の緩和も親しみも喜びも慰めも見出さるゝ所としたいのであるから諸君の厚意に依り食堂内に出来るだけ美術的裝置を施したいと思ふのである。

▲其二^{きしやう}は簡易食堂の徽章を案出して貰ひたいのである。建築物にも器具一切にも何等かの好い暗示を與へる一定の徽章を用いたいと思ふ。實は私は「簡易」の意を體して三角形を徽章としたいと考えたのであるが餘りに單純に過ぎはせぬかとの批評もあり自分にも美術的でないと感もするので廣く諸君の考案に俟^{まち}つ事にした次第である。

▲最後に簡易食堂は市民食堂であることの理解を有つて貰ひたい。即ち此の食堂は市民全體の共有物であると言つて差支ない譯であるどうぞ其の心持を以て各方面から此の事業の

発達を助けて貰いたいものである。尚建築全部出来上る迄は市内南大津町千代田生命保険會社階上に同事務所を設け置くことを附記する。

名古屋新聞 1918年（大正7年）9月29日

豊橋にあったその名も「河原座」という劇場を買い上げ、それを解体した古材を名古屋まで船便で運ぶという。今日で見れば建設廃材のリサイクルだが、製材も人力で行っていた時代に古材は貴重な建築資材であった。船積みして運ぶのも、輸送費を少なく安価に建設する工夫のうちである。このように往時のほうが持続社会的であるというのは、考えさせられるものがある。

これで建坪四〇坪、浪山期待の総二階建てで延べ床七〇坪、家具調度もそろった食堂が新調されることになった。浪山は文化的、芸術的にとがんばり、世情逆手に、篤志家諸君にお願いする。絵画でも盛花鉢でも鏡でも、楽器もいい、贅沢品と見なされている品物を寄付して下さいと言う。何と、したたかであることか。

食堂のマークを、この時代に台頭してくるロシア・アヴァンギャルド風の三角形にしようと考えたというのも、まさに時代を先取りしているモダニスト浪山の面目躍如たるところである。

8. 醸金者への経過報告

簡易食堂を開設しようという事業の手続きがさらに進展するなかで、これを紹介し醸金者への経過報告書を書いた記事がある。ここには、簡易食堂開設への更に具体的な作業が進み、中央食堂建物の建設への手順が示され

ている。

これも新聞に掲載されたものであるが、その記事を以下に紹介する。

●簡易食堂の事務進む

寄金者へ報告し 事業開始近し

木津氏等の発起に係る簡易食堂は、その後の設立事務着々進行し、既に工事に着手したるにつき八日各寄金者に対し左の如き報告書を発送したり。

^{かねて}豫て御配慮を^{かたじけなく}辱なせし簡易食堂設立につきては、左の如き経過に御座候間、其の概略御報告申上げ候

甲 中央食堂（共楽園内）

一、 建築材料の主要部品は豊橋市河原座を二千五百圓（運賃共）にて買入れたること

一、 前記材料（元平屋造り）を以て二階建に改造することにし、其の工事費は六千七百八十五圓二錢五厘にて、市内音羽町井上初太郎氏に請負はしめたること、即ち食堂建設費は建坪六十八坪総二階として坪約一百圓なること

一、 地所借入れにつきては、共楽園と五年を一期として二十年間借用の契約を締結すること

一、 建築設計は名古屋市土木課神保技師の指導を仰ぎ、鈴木技師に依頼して其の成案を用い、且つ工事の監督を依頼したること

一、 財団法人組織の申請書は去月二十九日其筋へ提出したること

乙 東 部 食 堂（奥田町）

奥田町遊園地は本月中旬に於て設備さるゝことゝ相成りたるにより、同地域内に附設すべき食堂設計も^{しゅつらい}ほぼ出来し、近く請負契約に附すること

丙 西 部 食 堂

名古屋救護会の開設する労働寄宿舍に伴ふの必要有之候處、同寄宿舍の位置目下交渉中に属する由につき、同事業の開設未だ豫定せられざるを以て、位置及び設計を御申告すること能わざるを遺憾とす

右の如き次第にて、事業の進捗甚だ遅々たるの觀あるは一日も早きを貴ぶ斯の事業の性質として、各位より怠慢のお叱りを蒙るを免れずと存じ候が、當初早速間に合せ主義によりてバラック若しくは天幕を以て開始すべしとの説も有之候が一時的のものを作り候ても尚二三千圓を空しく抛たざるべからざるが故に、寧ろ多少時日は遅引するも、永久的設備を為すに如かずとの意見に従いたる所、永久的設備を為すに於いては、第一に位置の選定、第二に建築設計及工費に十分の意を用いざるべからざるは當然の儀に之有、東奔西走協議會を重ねること十数回、事を慎重に處せんとするの結果、荏苒今日に至りたる次第に御座候が、既に前記の如く諸般の準備相成りたる上は、最善の努力を盡して、一日も早く竣工の上、事業を開始して、市民の便宜を計り、各位の意の在る所を知らしむるに力むべく候。

追つて、場合により建築落成まで、享樂園主が同館の設備を利用し、食堂を假に經營したき希望を存するゆゑ、之を承認いたし置き候間、豫め御承知願上候。

名古屋新聞 1918年（大正7年）10月9日

事態は急を要している事業であることと、折角の寄金を無駄にしたいくないとの考えをいかに折り合わせるかがここでの課題であった。中央食堂は、事業の中でも大きな部分を占めていたが、浪山が発起人として木津氏等の中

に加わっていたことは、拙速論を遠ざけ、「寧ろ多少時日は遅引するも、永久的設備を為すに如かず」とする意見を現実のものとするこゝとで有効であつたと考えられる。

さらにその判断は、「永久的設備を為すに於いては、第一に位置の選定、第二に建築設計及費用に十分の意を用いざるべからざるは當然の儀に之有」ということになった。

土地の借り入れは、共樂園との間で20年の借地を5年を一期として契約するとした上、建築工事を請け負った大工も、契約した金額もきちんと明示されている。

その上「建築設計は名古屋市土木課神保技師の指導を仰ぎ、鈴木技師に依頼して其の成案を用い、且つ工事の監督を依頼したること」とされている。一般新聞には、今日ですら建物の設計者が紹介されることはまれであるのに、これを公表していることは注目されてよい。

神保技師とは、同年年9月22日から27日にかけての、延べ4回にわたって反射鏡に掲載された「都市計画に就て（談）」で、都市計画の理念を説き、当時新たに施行された市街地建築物法を紹介している神保芳松であると考えられる。名古屋市人事課にも当時の職員録は残っていないので、鈴木技師については未だ不明である。なお神保が当時構想されていた名古屋で初めての市営住宅建設計画の担当技師でもあつたことが当時の紙面に紹介されている。

9. 中央食堂開設の経緯の特徴

以上の経過をもつて、浪山の簡易食堂開設への呼びかけの波紋は、2カ月弱という実に短時日の中にひろがり、募金から始まり、用

地の選択から具体的な建物の建設の企てまで進んだ。実際に、永久的設備をと慎重に進められていた中央食堂もこの年のうちに竣工し、翌年頭には開店の運びとなるのである。

何故、浪山らによる中央食堂開設への取り組みがこれ程の成功を短時日に上げ得たのであろうか。一応、本稿としてのまとめを試みておきたい。

まず、簡易食堂開設の必要性を受けとめる時代的な要請があった。1918年（大正7年）は、世界的には第一次世界大戦、ロシア革命の勃発、国内では米騒動、日本軍部のシベリア出兵といった内外の不安が一時期に集中して爆発したのであり、この夏はまさに20世紀最大のエポックに当たる。

最初の浪山の投稿が紙上に掲載されたのが8月11日である。おりしも富山の漁村に始まったという米騒動が名古屋の町に広がったのは同月8日といわれ、騒動は一週間の間に市民らの大暴動というピークに達している。

この時期、庶民の身近な生活の細部にいたるさまざまな場面に現象し、この頃に庶民の生活に忍び寄っていた近代化の波は深く後の世に影響を与えるものであった。とりわけ貧困化する小作農や厚さを増しつつあった労働者階層による争議が頻発するなかであって、未だこの国は政治的な安定を得ず^(註・8)、事態の收拾と問題の根元を探ろうとする関心のひとつは、貧困層救済に解決の糸口を求めている。最初に、募金の相談に乗った知事をはじめ有力者たちが同意を示したのは、彼ら自身の発想の基盤がその時代のうちにあったことを物語っている。

第二に、個人の資産に依らず募金によってこの事業を興し、進めるということは、成果

を皆のものとする点でひとつの特徴であったが、これを進めるにあって行政や財界を味方につけることは周囲の情勢から見て重要な手続きであった。

世は庶民が謳歌する大正デモクラシーの頂点に間近な時点にあったが、一身を擲とうという興良をしても「こんな時節柄」と言わせ、募金の取り組みに慎重だったように、米廉売や出征兵士・家族慰労の募金に対して、簡易食堂のそれは地域的であり、どちらかといえば理念的で、階層の限られる募金であつたらう。だからこそ、維新以来の法治主義への期待と、封建的、保守的な気風と結びついた官僚的権威、あるいは維新経済のなかで成長した資産家や経営者といった勢力からの賛意表明や協力は、募金活動の正当性を示し、大きな力添えでもあった。

明確な姿こそ見せてはいないが、簡易食堂設立案協議会に参加した松井知事が、食堂開設に当たって行った注意や、堀田内務部長の簡易食堂不要論^(註・9)といったものは、官僚の中に、食堂開設が市民意識の高揚を招き不穏な動きとなりはしないかといった、治安上の不安があったことを裏書きしている。

第三に、この事業を進めるにあたって、当時唯一の市民的メディアであった新聞^(註・10)が大きな役割を演じたことを挙げる。

浪山の最初の投稿自体が反射鏡欄という新聞紙上のものであり、二度にわたって続く彼の投稿も、あるいは興良の記事や協議会の記事、募金状況の報告、本稿では省略したがこれらを巡って交わされる周辺からの意見、それらが紙面を行き交っている。こうした意見や報告の紙面での公開（別表参照）は、一部にあったと思われる不安論を抑え込み、難し

い時期に想定額の二倍を越える募金を集め得た。こうした情報の公開が開設後の食堂に寄せる期待を増していったであろうことは疑いない。

第四に、簡易食堂の社会的な性格を拡張したことに注目しておきたい。

記事を読むと、何を指して簡易食堂というかはあまり明確ではない。大阪の同彊会^(註・11)のような貧民食堂、あるいは街の一膳飯屋、職場や地域での共同炊事といったものがそれぞれに簡易食堂の名をもって示されている。料亭や待合いあるいは西洋料理店を別として、従前は外出する人たちは弁当持参であって、いわゆる外食という習慣はようやくこの頃からはじまったのではないと思われる。東京、大阪、京都、横浜、神戸に次いだ規模、人口40万といった当時の名古屋の都市規模と、産業構造の変化が新しい生活様式の必要を呼び起こしたともいえよう。都市勤労者の外食のための食堂一般を簡易食堂としたとき、それがまず貧困層、浮浪労働者を救恤するために設けられることは大阪の例で見ることができる。

浪山の提案は、新橋の平民食堂からであった。新橋の食堂の実態は未だ不明確であるが、これも恐らく救恤的、慈善的な性格の強いものであったと考えて大差ないであろう。然るに浪山の平民食堂の構想はこの考えを反転し、俸給生活者、市民一般を対象とし文化的、情操的な生活の確保をうたった。ここに浪山のいう平民食堂、つまり中央食堂の特徴^(註・12)があるとみる。貧民、細民の差は何かと問う一方で、中産階級が崩壊しつつあるという危機感も紙上にみるが、ここには「彼らを救おう」とするのか、「吾等のもの」としての市民的利

用を軸として展開するのかの違い、運動の主体にとって此岸か彼岸かの違いがあった。

第五に挙げておきたいのは、長野浪山というキーパーソンの存在である。彼の構想は一面で理想主義な色彩が強いが、同時に、それを実現しようとするに当たっては非常に具体的な行動提起を示しているところに特徴がある。彼自身、「理想と現実の橋渡し」^(註・13)と述べているが、その行動が與良の良心とともに新聞メディアを動かし、宗教家としては論争相手であった木津や成瀬とも結びついて、それが官僚、財界人らにもひろがっていったのである。

とくに、他の論者が貧民救済しか視野にないなかで、前述の如く中央食堂の構想が彼をして抜きん出ていることは特筆すべきことであろう。しかしまた、それが一部の官僚らにとって不安な材料でもあった。

地域における住民の生活の必要から生み出された生活空間をコミュニティ建築と言うならば、浪山の構想した中央食堂はその範疇にある。

人心のまとまりを求め、生活を在るべき基盤に乗せようという思いがあつてのことか、この時期には市営住宅計画をはじめ、公設市場、託児事業、職業紹介所など、今日にまで引き継がれるいくつかの事業が取沙汰されている。コミュニティ建築の構想が人々の中にひろがっていく時代であったといえよう。

その渦中であつて、中央食堂設立の経緯はコミュニティ建築誕生の過程の一典型であり、その特徴は明日に向けてなお教訓的であると指摘して本稿を終わりたい。

簡易食堂関係記事 一覧表（名古屋新聞）

1918 年（大正七年）分

日 付	著 者	見 出 し	備 考
8 月 10 日	與良生	署名記事 速に公設市場を設けよ	
11 日	浪山生	反射鏡 平民食堂	
11 日	崙山生	署名記事 営利事業としての簡易食堂（上）	名古屋にて
14 日	崙山生	署名記事 営利事業としての簡易食堂（下）	名古屋にて
22 日	與良生	署名記事 大阪の簡易食堂を見る（一）	
23 日	與良生	署名記事 大阪の簡易食堂を見る（二）	
24 日	與良生	署名記事 大阪の簡易食堂を見る（三）	
25 日	太刀生	反射鏡 食堂の一隅から（一）	
25 日	與良生	署名記事 名古屋に簡易食堂を設くるならば	
26 日	太刀生	反射鏡 食堂の一隅から（二）	
27 日	與良生	署名記事 名古屋に簡易食堂を設くるならば—食堂智識大綱	
29 日	雲生	反射鏡 労働寄宿舍の設立	
9 月 2 日	浪山生	反射鏡 簡易食堂に対する希望	
5 日	一般記事	簡易食堂設立案成る	
8 日	一般記事	市の公設市場—本市の方針は斯うなるか	
11 日	一般記事	公設市場は本月末	
15 日	一般記事	一日五銭の節約を得る—一宮の共同炊事	
16 日	手島益雄	署名記事 東京の平民食堂	東京にて
29 日	浪山生	反射鏡 三たび簡易食堂に就いて	
10 月 4 日	一般記事	中等民の食堂—名古屋と東京の比較—三越といとう呉服店	
5 日	一般記事	簡易食堂—郵便局で実行す・食費タッタ八銭	
5 日	一般記事	簡易食堂の事務進む（寄付者へ報告、事業開始近し）	
12 日	一般記事	小簡易食堂から—高い井物が売れる奇現象—生活難の反映	
15 日	一般記事	今日の生活難では—細民の為の子供預かり所—設置は当面の急務なり	
17 日	一般記事	公設市場四ヶ所—11 月から愈々開始—市場規程	
24 日	無署名	市井評論 公設市場・無料浴場・廉売後始末	
24 日	一般記事	公設市場開始は十日か—最初は中区	
27 日	一般記事	新開店の食堂—南伏見町・ミクニ食堂	
30 日	一般記事	大名古屋建設の第一歩—細民長屋の改善	
11 月 8 日	一般記事	店開きに間近な公設市場と簡易食堂	写真入り記事
12 月 26 日	一般記事	下奥田町に遊園地（簡易食堂も近々開始）	写真入り記事

註

註1：畔柳武司、井元家住宅について、日本建築学会東海支部研究報告集第36号、1998.

註2：JAM SESSION STAGE-2—ゲスト・伊藤晴彦、RISS（日本福祉大学社会情報システム研究所ニュースレター）No. 4、1999.

註3：中野二郎、1902年瀬戸に生まれる。名工図案科卒業ののち名高工で鈴木禎二の助手となるがギター、マンドリンに熱中。独学で独奏者となり作曲活動を行う。戦後、NHK 名古屋オーケストラ専属指揮者を務める。楽譜コレクションを同志社大図書館に寄贈、名古屋音楽界の最長老である。

註4：鼎談・むかし、なごやの音楽事情、C & D No. 88、1990.

註5：対談・大正末～昭和初期の名古屋①、C & D No. 108、1996.

註6：実名は長野直一郎（1870～1959）、浪山は号。杉田悦子編、人間浪山、浪山会刊、1960. に自伝をみる。以下、自伝というのはこれを指す。

註7：加藤直次郎（1858～1930）、医師、社会改良主義者。1903「平民新聞」の創刊を支援するかたわら、自ら「直言」を刊行した。のちに加治と改姓。

註8：三谷太一郎、新版・大正デモクラシー論—吉野作造の時代、東大出版会、1997.

註9：反射鏡（1918年8月25日付）の太刀生「食卓の一隅から（一）—簡易食堂論」

註10：当時、新聞紙面は新聞条例等に基づいて内務省新聞局の取り締まりの対象であり、名古屋新聞の客筆であった茅原華山が筆禍で拘留されるなど、報道の自由は

確立していなかった。

註11：名古屋新聞（1918年8月23日付）

與良の記事「大阪の簡易食堂を見る（二）」。
自彊会は、明治末に警察の旧庁舎を利用して発足した慈善組織、簡易食堂は大阪市日本橋通り四丁目にあった。米騒動の中にあつて暴徒らはこれを守り、米の荷車にも手をつけなかったと云う。

註12：反射鏡（1918年8月26日付）、「食卓の一隅から（二）—簡易食堂論」で太刀生は「簡易食堂は又の名、平民食堂である。平民食堂の名によりて所在に經營されてゐる食堂もあるがこれは主として労働者のために設備されてゐる、未だ獨身の下宿生活者、月給取り、勤め人の如き人人のために簡易なる食堂を開いたものがない、今度、名古屋で出来る簡易食堂の一つは、それ等を顧慮して中産階級のために設けられるのは喜ばしい」と言っている。

註13：名古屋新聞（1918年8月3日付）の「私の領分」という随想欄に浪山は友人で、詩人の金子白夢を理想派の中の理想派と指し、自らを「君と世間との間に橋を造るのが私の職分」と言っている。